

國學院大學學術情報リポジトリ

The relationship between Mitsuya Shigematsu
and Takeda Yukichi : concentration on letters to
Takeda Yukichi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001956

三矢重松と武田祐吉の関係

— 武田来簡を中心として —

渡邊 卓

要旨

三矢重松は、國學院大學の第一期生であり、博士号取得第一号としても知られる。三矢は、折口信夫の師でもあり、『折口信夫全集』の中にもしばしば登場する。三矢と折口の関係が知られる一方で、折口信夫と旧制中学校・國學院で共に学び、後に國學院大學教授となった武田祐吉と三矢の関係はこれまであまり知られていない。平成十九年に渋谷校舎の改築に伴う図書館移転の際に、伝統文化リサーチセンターのプロジェクトの過程で武田祐吉に関する資料が新たに発見された。その中には、武田祐吉宛の三矢重松の書簡十通も含まれていた。書簡の年代は大正二年から十年にかけてのものであり、武田が國學院を卒業した直後の書簡も含まれている。本稿ではその三矢重松の書簡から、三矢と武田との関わりを明らかにし、当時の交友関係や学問形成の一端を確認する。それによって、当時の國學院大學の様子を明らかとする。

キーワード

武田祐吉、三矢重松、折口信夫、國學院、上代文学

一 はじめに

三矢重松と武田祐吉は、いずれも國學院大學教授を務めた人物である。

三矢重松は酒田県鶴岡町大字二百人町（現在の山形県鶴岡市）に生れ、明治二十三（一八九〇）年九月に國學院大學を第一期生として卒業した。はじめは文部省官房図書課に勤務するも、時の文部大臣を批判し自ら職を辞し、教育者の道へと進むのであった。東京開成中学校、岡山県高梁中学校、大阪府立第五中学校の教員を経た後、上京して亦楽書院（後に宏（弘）文学院）で中国人留学生を教育しながら、國學院の講師を兼務した。三矢の学問は国語学を中心としており、三矢が唱えた文法論は今日では定説となっているものも少なくない。

三矢重松は、折口信夫の師としても語られる。折口にとって三矢は「師の大人」として位置づけられ、大阪府立第五中学校と國學院の両方で三矢は折口の恩師である。折口は三矢の没後に、三矢が設立した「源氏物語全講会」を継承したり、三矢の『源氏物語』に関する蔵書を、國學院にもたらしたりしている。また、没後の祈年祭では、折口が斎主を務めており、その思い入れの深さがうかがわれる。

三矢と折口の関係が知られる一方で、折口と旧制中学・大学と共に学んだ武田祐吉と三矢の関係は、これまであまり知られていない。これは、残っている資料の数によるものであり、三矢と武田との間に全く関わりがなかったということではない。三矢、折口、武田の関係を示す資料としては、三矢没後の昭和二（一九二七）年九月に函書院から共著として刊行された『隠岐本

新古今和歌集』があり、学問のつながりがあったことは間違いない。

武田は貴重な古典籍を多く所蔵し、自らの研究に活用していたことは有名である。それらの武田旧蔵の古典籍は、現在「武田祐吉博士記念文庫」として本学に所蔵されているが、國學院に伝えられた武田関係の資料はこれだけではなかった。平成十九（二〇〇七）年に渋谷校舎の改築に伴う図書館移転の際に、伝統文化リサーチセンターのプロジェクトの過程で武田に関する資料が新たに発見されたのである。新出資料は自筆原稿・講義メモ・ノート・カード・書簡・影印・修了証書などが含まれており、武田祐吉の学問に関する資料の他、人物そのものに関する資料も多く含まれていた。それらの資料は現在、調査・整理中であるが、その中に武田祐吉宛の三矢重松の書簡十通も含まれていた。本稿ではその三矢重松の書簡から、三矢と武田との関わりを明らかにし、当時の交友関係や学問形成の一端を確認することにする。それによって、当時の國學院大學の様子をも垣間見ることともなろう。

二 武田卒業直後の書簡

武田祐吉は、明治十九（一八八六）年に東京市日本橋区堺町（現在の東京都中央区日本橋人形町）に生まれた。國學院大學卒業後は、神奈川県立小田原中学校教諭となるも依願退職し、東京帝国大学の万葉集校訂嘱託となったのであった。⁴この度の新出資料に含まれていた三矢の書簡の一部は、武田が國學院大學卒業直後のものである。そして、まさに武田の就職活動の状況を知ることのできる書籍である。小田原中学校に赴任する以前に、武田の就職活動の支援を三矢が行っていたことが書簡によって明らかとなった。

I

（封筒裏）「小石川原町百二十

松本亀次郎様 三谷重松

（封筒裏）「地図」

武田祐吉氏持参

拝啓、昨日御話申上候、國學院大學国文科最優等卒業生武田祐吉氏、御後任二希望の趣、人物など御面会被下候ハ、大略相分り可申、よろしく御推薦奉願候、草々、

七月十四日 重松

松本老兄

侍史⁵

この書簡は封筒の表書きから、松本亀次郎宛の三矢重松の書簡を武田が持参したものである。内容は武田の就職に関するもので、封筒の裏に書かれた地図は、おそらく武田が面接に赴いた先の地図であろう。書簡には「國學院大學国文科最優等卒業生武田祐吉氏」とあり、武田は國學院大學在学中から非常に優秀であったことがうかがえる。その武田を、三矢は松本の後任としてお願いしようである。

書簡の宛名の松本亀次郎とは、「中国人留学生の父」と呼ばれ中国人留学生の日本語教育に尽力した人物である。まず三矢の周辺環境として中国人留学生の日本語教育について述べることにする。⁶中国人留学生に対する日本語教育の草分けは嘉納治五郎であった。中国人の日本留学は、明治二十九（一八九六）年に清朝政府が十三人の留學生を派遣し、その教育を東京高等師範学校長の嘉納治五郎に委託したことに始まる。そして嘉納治五郎によって、中国人留學生の教育機関である亦楽書院が創立されたのである。三矢重松も嘉納治五郎に招かれて、中国人留學生教育のために上京したのであった。三矢は明治三十二（一八九九）年九月二十八日に大阪府立第五中学校を退職し、同年十月に亦楽書院の主任となっている。亦楽書院は三十五（一九〇二）年一月に名称を宏文学院と改め、松本は三十六（一九〇三）年に嘉納の招きに応じて佐賀師範学校の教員を辞し、宏文学院の教授となっている。三矢は三十六年七月に宏文学院を退職しているので、三十六年前後で三矢と松本は

知り合ったのであろう。

松本は明治四十(一九〇七)年から四十五(一九一二年)四月までは中国に渡り日本語教育を行っている。帰国した松本は、懇請されて東京府立第一中学校(現在の日比谷高校)の教諭となっている。在籍はわずか一年のみであり、翌大正二(一九一三)年八月には職を辞している。武田が持参した書簡に年代は記されていないが、武田は大正二年七月七日に國學院大學を卒業している。松本の辞職の年と一致している。したがって、三矢は松本が赴任していた東京府立第一中学校の後任にと武田を推していたのである。

しかし、武田祐吉の職歴や年譜を見ても東京府立第一中学校の教諭になったという記録はない。したがって、松本の後任になることはかなわなかったのであるが、これまで知られることの無かった三矢と武田二人の関わりを示す書簡である。三矢は折口との関係のみ着目されていたが、武田の就職のために三矢が尽力していたことが、この書簡から明らかになった。

三矢が武田の就職の斡旋をした形跡は、松本亀次郎の後任のみではなかった。次の書簡も武田の就職に関してのものである。

II

(封筒裏)「政法学校にて

武田祐吉殿

親展」

(封筒裏)「三矢重松」

拝啓、今日の御授業ハ極めて体を得たるものと拝見、大ニ喜居候、唯貴君の性格の然らしむる所かぎやかならず、陽気ならぬ点ハたしかに見受候、此儀御耳ニ入れおかと存居候処、学校の方より生徒のうけ方亦さ様なりしやうニ相聞え申候、何卒こゝ一週間位精々御注意被下候て教授方にぎやかニ

陽気ニ

愉快ニ

親しげのあるやうニ

油のかゝるやう

御工夫之程千祈万禱仕候、少し御無理なる注文の様ニ候へども、かやうなる御修養も決して徒爾には有之間敷存【居】(候)ニ付、無遠慮ニ申上候、草々謹言、

三月十六日夜 重松

武田君侍史

この書簡は、武田の授業に対する三矢の意見が認められている。三矢は直接、武田の授業を見た上で手紙を書いている。武田の授業を見た三矢は改善の余地があると思ひ、武田に「授業はにぎやかに、陽気に、愉快に、親しみのあるやうに」と助言している。また次の「油のかゝるやう」は、他の文字に比べやや小書きで書かれており、三矢が中国語に精通していたことを考え合わせると、この言葉は恐らく中国語の「加油」のことであろう。「加油」とは、精を出すという意味で、頑張れということである。その他にも「千祈万禱」と記しており、三矢は、武田に助言だけではなく、励ましの言葉もおくっているのである。書簡にあるやうに、武田の性格故に、あまり好ましくない授業であったやうである。学校側の評判もそのやうであったため、三矢が授業を見学し、武田に助言を与えたのであろう。

この書簡には切手や消印はないため、封筒の表書きが示すやうに、「政法学校にて」武田の手に直接渡ったものであると考えられる。三矢は武田の授業を見学した晩に筆を執り、武田に助言を与えたのである。政法学校とは、これも中国人留学生の日本語教育に関連する学校である。政法学校は、大正三(一九一四)年二月に神田錦町三丁目にあった東京工科学校の校舎の一部を借り受け創設された。これは主として孫文や黄興一派に属する政客が、「第二革命」に失敗した際に日本へ来た亡命者のために設けられたのである。したがって武田の生徒も中国人であり、大正三年三月に武田が政法学校の教壇に立っていたことが書簡によって明らかになった。中国人留学生教育や三矢

が武田の授業を視察していることなどからも、やはり三矢が武田に就職先を紹介したのであろう。政法学校の創立が二月で、この書簡が三月であるから、政法学校の草創期に武田は関与していたことになる。

この書簡につながる書簡が次の一通である。

III

(封筒裏) 「小石川区金富町五十【四】(二) 高梨方

武田祐吉殿

親展」

(消印) □.4.21

(封筒裏) 「高田村一六四三

三矢重松」

その後如何御暮し被成哉承候へば、御母堂様御病氣にて御看護中のよし、御心痛御察申上候、折角御大事可被成候、扱政法学校にて御断申候を御氣之毒二おもひ乍輕少別封御届申くれとの事ニ御坐候間、御受取可被下候、実ハとくより川崎氏貴寓二伺候つもりにて延引、とかく多忙にてあまりおそなはり候とて、今日小生へ頼来候事ニ御坐候、御存知の上ハ一寸川崎氏へ御挨拶状御遣し被下度候、先ハ用事のミ、草々謹言、

四月廿日夜 重松

武田大兄侍史

(別封) 「謝礼 政法学校

武田先生」

この書簡の消印の年次は、切手と共に切り取られているが、政法学校のことや、武田が高梨方に住んでいることから、大正三年の書簡であろう。この書簡から、武田は政法学校での職を失ったことがわかる。この書簡には、「謝礼 政法学校 武田先生」と書かれた別封があり、政法学校から謝礼が同封されている。これは、川崎氏が武田の自宅に伺うつもりでいたが、延引してしまい、遅くなってしまうとこのこと三矢に託したものである。この書簡は

武田が政法学校を解雇された直後のものであり、就職がうまくいかなかったことを物語っている。川崎氏とは川崎万蔵のことであり、政法学校の後援者の一人である。武田は三矢の心配通りに、政法学校の教員としてはうまくいかなかったようである。川崎が三矢に別封を託していることから、やはり此度の就職口も三矢の紹介に拠ることは間違いないであろう。

これらの書簡が示すように、武田祐吉は國學院を卒業後に、三矢の紹介を受けながら就職活動を行っていたのである。武田が小田原中学校に赴任する以前の武田の動向を知ることとなった。

三 小田原中学校就職後の書簡

先の書簡からは、武田祐吉の國學院大學卒業直後の様子と三矢との関わりを知ることができた。武田は、大正三年五月に小田原中学校の教諭となるが、三矢と武田の交流は、小田原中学校に赴任した後も続いていた。それを物語る書簡が次の一通であり、武田は転職の折にも三矢に相談していたようである。

IV

(封筒裏) 「神奈川県小田原中学校

武田祐吉殿

親展」

(消印) 4.9.20

(封筒裏) 「東京市外高田村一六四三

三矢重松」

貴書拜見、

御方針変更の事ハ他氏よりも一寸承居候、御勇断御尤ニ存候、乍併小生ハ一体平凡主義の男故今しばらく(両三年)教員生活被成候とも御損ハ

有之間敷と存じ候、その精神にて先日も御話申候事にて只今とも意見ハ同様に候ニ付、御変更方針ニハ賛成も不致、又反対して御とめ可申確信も無之候、就いて承度ハ

一、御希望の仕事といふハたとへば如何なる風のものか、

二、収入ハ如何程の御見当か、

三、御残業として御さき被成候時間ハ如何程、

四、東京にても教師ハ御ざらひか、

五、史料編纂の方などハ如何、

六、六国史国訳の方ハ真ニ御希望か、

等ニ有之、右御報相待候て、更ニ可申上候、草々謹言、

九月十九日 重松

武田学兄侍史

ひさぎぞとうち喜びしかひもなく又きさくけとおほせられつる

御病気折角し御大事可被成候

この書簡は大正四年九月十九日に書かれている。「貴書拝見」から始まっていることから、武田の書簡に対する返事である。武田は教諭を辞め方針変更をしたいと三矢に相談したのであろう。武田が転職を希望していることは三矢以外にも伝わっていたようである。それが三矢の耳にも届いていた。三矢は「御勇断」とするも両三年は教員生活をして損はないと武田に助言している。武田は転職の相談を、以前からも三矢にしていたようであり、それに對し、三矢は賛成もせず、また反対もしていない。そして三矢は、この書簡で再就職に関して武田に六つのことを尋ねている。

一、ご希望の仕事というのは、例えばどのようなものか。

二、収入はどのくらいのもりか。

三、残業に割ける時間はどのくらいか。

四、東京であつても教師は嫌か。

五、史料編纂などはどうか。

六、六国史国訳の方は本当にご希望か。

一からは、武田が希望する職業が具体的に未だ決まっていなかったように思われる。おそらく武田は、教員を辞めたいという意志だけは三矢に伝えており、具体的には伝えていなかったようである。一、三は三矢が職業を紹介するにあつての条件であらう。教員を辞して方向転換をしても、生計を立てていかなければならないであらうし、また武田の希望を知った上で、三矢は職業を紹介しようと考えたのであらう。そして四からは、武田が教員として働くことに強い否定をしていたことがうかがえる。武田は転職を希望するというよりも、むしろ教員を辞したいという思いの方が強かつたのではなからうか。また四には「東京にても」とあることから、小田原から東京に戻りたいと武田は三矢に伝えていたのであらう。五と六は、武田の希望する職業に対する三矢の提示である。六に對しては「真ニ御希望か」と尋ねており、その真意を確かめている。恐らく武田は、少なからず研究職へ進みたいとの意志はあつたようである。この五と六の質問は、武田の転職の方向を少なからず示しているよう。

書簡の終わりには、歌が一首添えられ、武田の病状を案じ筆を置いている。歌に詠み込まれている、「ひさぎ」は『万葉集』中にも詠まれる植物である。「ひさぎ」には川辺などに自生する「きささげ」とする説と、山地原野に自生する「あかめがしは」とする説がある。「ひさぎ」は「久木」と書き、柿本人麻呂は

度会の大川の辺の若久木我が久ならば妹恋ひむかも(12・三二二七)

と詠み、「若久木」のワカヒサと「我が久」のワガヒサは類音によつてかけられており、「久木」から「久し」を導いている。また山部赤人は、

ぬばたまの夜の更けゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く(6・九三三)

と「久木」を単なる景物としてではなく、「久し」という語の贅美性のもとに歌に取り込んでいる。この他にも『万葉集』中にみられる、「浜久木」などの複合語の「久木」も「久し」との関連で用いられているとされる。したがつ

て、「久木」を詠み込んだ三矢の和歌は、久しく小田原中学校で働いてくれるものと喜んでいたのに、ということであろう。また「きささげ」は、「き(来)」と「ささげ(捧げ)」の意と解釈でき、東京に来て、その身を研究に捧げるというのか、というと考えられる。小田原中学校教諭からの転職を決意した武田に、三矢は『万葉集』を用いた歌を送り、武田に対して三矢なりの気持ちを伝えたのであろう。

この後の大正五(一九一六)年三月に、武田は小田原中学校教諭を辞して、上京する。この三矢の書簡から半年後のことである。そして武田は東京帝国大学万葉集校訂の嘱託となるのであった。ここから武田祐吉の研究者としての道が開かれるのであるが、このときも転職にあたり三矢の働きがあったと思われる。先の書簡五と六の質問にあつたように、武田は研究職となり上代文学の研究に従事することとなったのである。また武田の生涯で六国史の国訳は出版されなかったが、『国文六国史』¹⁰として、六国史の書き下しは武田の編纂によって昭和七(一九三二)から出版された

四 武田上京後の書簡

武田が東京帝国大学万葉集校訂の嘱託となった後も、三矢との書簡のやりとりが見られる。武田が上京する以前は、武田が三矢を頼ることが多かったが、上京後は三矢も武田を頼りとしていたようである。次の書簡には折口が登場する。三者のつながりが見て取れる書簡である。

V

(封筒表)「巢鴨宮仲二二四三

武田祐吉様

文会堂古郡氏持参」

(封筒裏)「目白

三矢重松」

拝啓、大暑御清適候哉奉伺候、先日ハ佐々木氏陳列書目御惠贈被下奉拝謝候、

陳者、折口氏万葉辞典七月十日ニ製本出来、配付すの旨公約の処、今日原稿不出来、且二百五十頁といふもの五百頁ニ余る予定と一昨日ハ折口氏の口上、それを何と処分するかと相談中絶の姿にて困入と文会堂編輯古郡幸介氏来談ニ候、折口氏ニ小生面会いたし度存候へどもこの両三日少し仕事有之、同氏の在宿ニてくはず事望無之、甚御気の毒ニ存候へども、貴君居中御まとめ被下候様御配慮被願間敷出来、その為右古郡氏御紹介申上候、万々御聞取被下度願上候、草々謹言

七月十二日 重松

武田学兄侍史

尚、昨日電話にて折口氏より書肆へ無捨印の本ありといふ申出有之候由、是ハ取調方可然、御手すぎニ貴君代人として御調被下候てハ如何なども考居候、

はじめに佐々木信綱の陳列書目を送ったことに対するお礼が書かれていることから、上京後も武田と三矢の交流は頻繁にあつたものと思われる。この書簡は文会堂の古郡幸介が持参したもので、内容の中心は折口信夫の『万葉集辞典』¹¹についてである。折口の『万葉集事典』¹²は、文会堂書店から大正八(一九一九)年一月に刊行されているため、この書簡はそれ以前のものである。『折口信夫全集』の大正六年の年譜には、

五月、國文口譯叢書第四篇・第五篇、『萬葉集』中卷・下卷出版。引續き武田祐吉及び國學院同窓の高柳光壽・安藤英方の助力を得て『萬葉集辞典』の編纂にかゝる。

とあり、この書簡は大正六年以降のものであろう。折口が『万葉集辞典』を七月十日に製本し配付すると公約していたところ、原稿が仕上がらず、さらに二百五十頁というのが三百頁以上の予定となつたと一昨日に古郡に口上が

あり、それをどのようにするかを相談していたが、中絶してしまい困って三矢のところに相談に来たとある。しかし、三矢は折口に面会したいが、仕事のため折口のところに行くことができない。それで、三矢の代わりに武田に仲立ちをして纏めてくれるように頼んでいる。そのため、三矢はこの書簡を古郡に持参させ武田に会いに行かせたのである。また三矢は、尚書きで、折口から書肆に捨印のない本があるという申し出があったことを伝え、武田が代理人として取調べてはどうかと書き加えている。恐らく捨印とは、著書の奥書に押す「検印」のことであろう。検印は出版社が印税をこまかさなために、著者によって押されたものであるから、折口は印税を気にしての申し出であったのであろう。この書簡からは、三矢が受けた仲立ちを、すべて武田に託している様子がうかがえる。大正六年五月には、武田祐吉の勧めで折口が著した、日本初全首口語訳の国文口訳叢書『万葉集』上中下巻が文会堂書店より刊行されている。おそらく、この『万葉集辞典』の刊行にあたっても折口と武田との間にやりとりがあったに違いない。

三矢が武田に依頼している書籍はこれだけではない。次の一通もそうである。

VI

(封筒表) 「市外巢鴨宮仲二二四三

武田祐吉殿

親展」

(消印) 9.9.15

(封筒裏) 「高田町大原

三矢重松」

新涼好適の候、益御勇健の御事と奉存候、突爾ながら昨今新聞二相見え候高等学校教員試験開始の件、實際ニ有之、御暇つぶしの様なるものなれど御受被成候ハ、貴君の御為にもあしき事も有之間敷、国学院などの為には多大の好影響可有之被存候、乃ち一書捧呈御す、め申上候、御同

意被下候ハ、幸甚、且ハ邦家の慶事と奉存候、草々謹言、

九月十四日夜 重松

武田学兄侍史

折口君・安藤君などもやつてもらひ度ものと存居候、是ハ内証にて御実行可然、準備不十分にて是是非第一回の試ニ御応じ被成候様奉希望候、再拜、

この書簡が書かれた大正九(一九二〇)年は、三矢が國學院大學の教授に就任し、武田と折口は國學院大學の講師になった年である。この書簡は、高等学校教員試験のことについてである。大正八年三月二十九日に定められた「高等学校教員規程」をうけてのことであろう。三矢は武田に受験するよりに勧めしており、資格を有することが國學院などのためには多大なる好影響があるといつている。そしてそれが「邦家の慶事」ともいつている。そして三矢は尚書きでは折口信夫と安藤英方にも受験してもらいたいと武田に伝えている。つまり、武田から折口、安藤にも勧めたいということであろう。さらに三矢は「是ハ内証にて御実行可然」として強く勧めている。三矢は武田を通して、折口たちへ意見を述べていたようにも受け取れる。

次の書籍からは、三矢と武田が互いに頼りとしていたことがうかがえる。

VII

(封筒表) 「本郷、東京帝国大学

文学部国語研究室

武田祐吉殿」

(消印) 10.5.29

(封筒裏) 「東京市外高田町大原一六四三

三矢重松」

拜啓、此間学校にてちよと御話可申上と存候うち御帰にて残念致候、万葉校本筆者二別紙のかきて如何ニ候ハ、是ハ師三橋宗利と申す俊才ニ候、大抵之文字もよめ、たゞの書家よりハ好からんかと存候事と夏休の

間二週間ほど八尾郷の為休みたまきもやう二御坐候、

川越中学の方ハ如何相成候哉、

先ハ用事のみ、草々如此二御坐候、謹言、

五月廿九日 重松

武田君侍史

追而、京大にて大阪平瀬本源氏物語二巻写真版二致候よし承候、右本貴室二参候哉、又乍序阿波文庫ニ水原抄といふ有之由、⁽¹⁴⁾芳賀博士ニ参候、貴室にて借入御申込御贍写被下候様の運ニハ相成間敷哉、御話あはせ被下候ハ、幸甚、イツレモ忘れく致【候】マ、一筆如此二候、

この書簡は大正十年五月二十九日のものであるが、宛先の住所は「東京帝国大学文学部国語研究室」となっている。武田はこのとき國學院大學の講師となっていたが、東京帝国大学での『校本万葉集』の囑託として未だ従事していたことがわかる。三矢はこの書簡の中で『校本万葉集』の筆者に相応しい人物を紹介している。『校本万葉集』は当初、活版印刷の予定であり、活字にない文字は木版にするつもりで版下の準備が進んでいた。大正九年中には大部分の原稿が完成し、いよいよ印刷に着手しようとしたが、『校本万葉集』の体裁があまりにも複雑で、大小各種の文字を用い、且つ木版にするも文字が多かつたため、いずれの印刷所にも製版に依じてもらえなかつたのである。そこでやむを得ず予定を変更し、全部を能書の人々に浄写させ写真に撮つたものを印刷することになったのである。大正十年七月から巻を別けての浄写が行われた。武田は、浄書の可能な人間を捜し、三矢にも尋ねていたのである。そこで紹介されたのが三橋宗利という俊才であった。三橋宗利とは橋宗利のことであり、『校本万葉集』において『万葉集』巻三・二十八を浄書している。また武田自身も巻一を担当している。武田は自身の仕事の相談も三矢にしていたのである。

また一方で三矢は、川越中学の方はどうなったのかと尋ねている。このことについては後に示す書簡において触れるが、教員の人事について触れてい

る。追伸においては、三矢が古典籍について武田に尋ねている。一つは京大にて写真版した平瀬本源氏物語二巻についてと、もう一つは「水原抄」の借用以来である。阿波文庫に「水原抄」なるものがあることを芳賀矢一から聞いた三矢は、武田に借用を申し込んでもらい、贍写するような運びにはならないかと申し込んでいたのである。この点から、古典籍については三矢が武田に信頼を置いていたことがうかがえる。

川越中学校のことについては、次の書簡に詳しく認められている。

VII

(封筒表)「本郷東京帝国大学

文学部国語研究室

武田祐吉殿」

(消印) 10.6.11

(封筒裏)「東京市麴町区飯田町

皇典講究所

三矢重松」

拝啓、過日川越中学の事承り、

米沢中学教諭

氏江富雄氏

御内意尋ね遣し候処、希望の旨返事有之候ひしより、先日交渉中の人有之趣の御話ニより見合せ居候処、此人旧知の人川越中学ニ在任とて、その方ニ頼入候趣申参候、前の交渉の人、極り候ハ、格別、さもなくては貴君よりも御推挙被下間敷哉、右氏江氏ハ師範部の外ニ外国語学校夜学華語もやりをり、人物学術天晴の仁二候が、郷里ニ引込候為十分なる待遇も受けず、只今百十五円ニ舎監之手当と官舎とを有しをり、百三十ならば参り度申、又転任も校長において上ニ被心得置アリ、十分待遇出来ヌ為内諾の由に御坐候、履歴も有之候得共、先大略申上候、何分宜しく願上候、草々謹言、

六月十一日 重松

武田学兄侍史

この書簡は、消印と内容からも先の書簡と連続するものと見て良いであろう。内容は川越中学校の人事のことである。三矢は米沢中学教諭の氏江富雄を推している。三矢が氏江に川越中学校での勤務の意志を訪ねたところ、就職を希望するとの返事があった。しかし、武田が交渉中の人物がいると知っていたので見合せていたが、氏江の知人が川越中学に在任していたため、その方に就職の世話を頼んだと氏江が三矢にいつてきたのであった。そのため、三矢は武田にその旨を伝える書簡を送ったのであった。三矢は、武田の推薦していた人物が素晴らしければいいのだが、そうでなければ、氏江のことを推挙してもらえないかと切願している。さらに三矢は氏江が人物・学術ともに優れていることを述べ、郷里に退いているため十分な待遇も受けていないと武田に説明している。先の書簡VIIでは、「川越中学の方へ如何相成候哉」といつてはいたが、三矢も人選を進めていたようである。三矢の頼みとあつては武田は、氏江を推さざるを得なかつたであろう。

川越中学校の人事に関する書簡は、もう一通確認できる。

IX

(封筒表) 「武田祐吉様 三矢拝」

(封筒裏) 「東京市麹町区飯田町

國學院大學」

貴書拝見、かきもの、方の事、人ハ学習院図書係ニ有之候へども手さへよくかくたしかなる人ならばよい訳と存じ、その旨申遣候処、別紙送り参候、ちと大ニすぎ、又細筆おくりこし度申候ニがともかく上手ニ候、ちよと御めニかけ候、川越中よりハ沙汰これなく候哉、

六月廿六日 重

武田様

この書簡には切手も消印もないため、直接武田の手に渡つたものである。日

付は「六月廿六日」となっており、川越中学校のことが書かれているので、これまでの書簡に連なるものである。「かきもの、方の事」とあるのは、『校本万葉集』浄写の人物のことであろう。学習院の図書係にいた人物が、能書家であれば良いであろうと、別紙でその実力の程を送ってきたが、文字が大きく『校本万葉集』の作業には相応しくなかつたために、改めて細筆を送らせたということが書かれている。そして、武田に会わせその能力を確かめてもらいたいとある。この書簡の最後に、川越中から連絡がないかと三矢は述べている。川越中学校の人事を三矢は非常に気にしていたようである。先の書簡VIIIから半月後の書簡であるが、氏江については何も触れられてはいない。三矢が武田に川越中学校のことを尋ねているところを見ると、川越中学校とのやり取りは武田が行っていたのであろう。

これらの書簡を見ると、武田は三矢を頼りとしており、また三矢も武田を頼りとしていたのである。川越中学校の人事にまつわる一連の書簡では、武田も三矢も、それぞれ人脈を頼りとしていたところがあるようである。次の書簡は武田に対する三矢の依頼である。

X

(封筒表) 「巢鴨宮仲二二四三

武田祐吉殿

親展」

(消印) 10.10.26

(封筒裏) 「東京市麹町区飯田町

國學院大學

三矢重松」

拝啓、過日は日本紀鈔難有拝受仕候、突然ながら御願の件有之、

嘉納治五郎氏国学研究の志あり、是ハ新計画の雑誌ニ発着するについての事ニ御坐候が、その為ニ顧問を云し旨にて小生ニ頼まれ申候、御多用

中とは存候が月三回位の見込にて、御出張被下間敷哉、(一)双方ノ時間ノ都合ヲツケタル日時(二)月二式十円の報酬とし、御苦勞をかくる分量ニ従つて盆暮には相当の事を可致見込ニ御坐候、御承諾被下候ハ、幸甚奉存候、いなや御一報を待ちて又可申上候、草々謹言

十月廿六日 重松

武田学兄侍史

この書簡も大正十年のものである。出だしは三矢が武田からもらった「日本紀鈔」に対するお札から始まる。この「日本紀鈔」とは、大正十年六月に明治聖徳記念学会から刊行された『日本書紀私鈔』のことである。この『日本書紀私鈔』は、南北朝から室町中期にかけての浄土宗の僧である聖岡による『日本書紀』の注釈である。刊行された本には、当時の明治聖徳記念学会会長の林博太郎のほしがぎが付けられている。それにはつぎのようにある。

財団法人明治聖徳記念学会研究所は、斯る珍書が、永く世に埋没しつゝあるのは、昭代の恨事、本邦学会の為、遺憾であることを思ひ、今回本会の評議員会及び理事会の決議に基づき、本会研究所長文学博士加藤玄智君の監督の下に所員文学士星日子四郎君及び武田祐吉君の両氏に依頼し、厳密なる校訂の下に、高瀬承厳君の解題をも付して、本書を上梓する運となった。

このほしがぎから、武田は『日本書紀私鈔』校訂作業に従事していたことがわかる。そのため、三矢に自分が関わった本を贈呈したのであろう。この作業から、万葉集のみならず幅広い武田の活躍の広さがうかがわれる。

三矢は、『日本書紀私鈔』のお札を述べた上で、本題に移っている。それは嘉納治五郎の文章顧問の依頼であった。嘉納は国学研究の志があり、新たに計画している雑誌の顧問を三矢が頼まれたが、それを武田に願ひ出ている。双方の時間の都合が付くときに月三回くらいの予定で報酬は月に二十円とある。また苦勞をかけた分量に従つて、盆暮には相当のことをするとある。この顧問による二十円は、当時の小学校教諭の初任給と同等の報酬である。²¹大

変良い待遇である。『國學院雑誌』所収の武田の年譜を見ると、大正十一年の項目に、「この頃、嘉納治五郎氏の文章顧問となる。」とあり、この書簡の後に武田が嘉納の文章顧問になったことは間違いないようである。これまで武田祐吉が、どのような経緯で嘉納治五郎の文章顧問になったかは不明であったが、三矢重松からの紹介であったことが、この書簡で明らかとなった。

五 おわりに

このように、武田の来簡から三矢との関係を見てみると、これまで明らかではなかった二人の関わりが見えてきた。就職活動に関する書簡からは、武田が在学中から三矢を頼りとしていたことが推測できる。これまで、三矢は折口信夫の師として知られることが多かったが、武田にとっても三矢は師であったといえる。

三矢が武田の就職、転職の面倒を見たのは、武田が「最優等卒業生」であり期待していたことにもよるのであろう。武田が研究職へ方向転換した後は、三矢が武田に頼み事をすることもあった。これも、武田が研究職として活躍していたからこそ、三矢は信頼を寄せていたのであろう。書簡に認められた、様々な事柄から三矢と武田の双方の信頼の具合がわかる。折口の仲立ちを武田に頼むのも、武田を信頼するからであり、嘉納治五郎の文章顧問の件もまたそうであろう。

この度の書簡は来簡のみで、武田がどのような返事を三矢にしていたかはわからないが、三矢の書簡を見る限り、武田と三矢の親交は深かったようである。

武田祐吉は、大正九年に國學院大學講師となり、十三(一九二四)年に京都帝国大学に学位請求論文「万葉集仙覚本の研究」を提出し、文学博士の学位称号を受け、十五(一九二六)年に國學院大學教授となる。武田は以降、

教授の本務の他に、文学部長、日本文化研究所研究審議委員、國學院大學大学院委員長を歴任し國學院の学問に貢献した。研究者としての道は、小田原中学校を辞し、『校本万葉集』の仕事に従事したことに始まる。これによって『万葉集』諸本の披閱が可能となり、武田の上代文献学への道が開かれたのであるが、研究職へ就くことの要因の一つに、三矢重松の尽力があったことは間違いないであろう。この度、確認された十通の書簡は大正十年までであるが、二人の関係は三矢が亡くなる大正十三年頃まで続いたと思われる。

國學院大學の国文学の一時代を担った研究者の交流が、これらの書簡から明らかとなった。研究者の人となりは、その人物が著した論文などによって理解される部分が多いが、このような書簡からは、研究者を取り巻く環境が見えてくる。書簡によって、研究者がどのような環境下にあつたか、またどのような人物との交流によって研究が構築されていったかを知ることができた。これらの資料は、当時の学問形成のみならず、國學院の歴史を知る上で重要な手がかりとなり得よう。

註

- ① 本稿における三矢の略歴は、三矢重松記念会『三矢重松先生伝』などを参考にした。
- ② 三矢重松の旧蔵書は「三矢文庫」として國學院大學に所蔵されている。
- ③ 三矢重松・折口信夫・武田祐吉『隠岐本新古今和歌集』（昭和二年九月 岡書院）。
- ④ 武田祐吉の略歴は、『國學院雑誌』第五十九卷十・十一月号（昭和三十三年十一月）掲載の武田祐吉博士年譜・著作目録に詳しい。
- ⑤ 書簡の翻刻に際しては、適宜訛点・改行を施した。また翻刻の【】は訂正を意味し、その後の（）は書き改めたことを示す。
- ⑥ 松本亀次郎慶応二（二八六六）年―昭和二十（二九四五年）（さねとうけいしゅう『中國留學生史談』（昭和五十六年 第二書房）に詳しい。）
- ⑦ 中国人日本留學史については、松本亀次郎『中華留學生教育小史』（『中華五十年遊記』付録 東亜書房 昭和六年七月）に詳しい。本稿では、『中国近代教育文献資料集』第一卷（日本図書センター 平成十七年）所収のものを引用した。
- ⑧ 嘉納治五郎万延元（二八六〇）年―昭和十三（二九三八年）年 教育家。講道館柔道

の創始者。『嘉納治五郎著作集』（昭和五十八年 五月書房）に詳しい。）

- ⑨ 注⑦に政法学校の後援者として名前がみえる。
- ⑩ 武田祐吉、今泉忠義編『国文六国史』（昭和七年 大岡山書店）
- ⑪ 佐々木信綱明治五（二八七二）年―昭和三十八（二九六三）年 歌人・国文学者。國學院の教壇にも立つ。『校本万葉集』の編者の一人でもある。武田祐吉は佐々木の後任として、國學院大學の講師となる。
- ⑫ 高柳光寿明治二十五（一八九二）年―昭和四十四（一九六九）年 歴史学者。國學院大學教授、立正大学教授を兼任。
- ⑬ 安藤英方明治二十五（一八九二）年、北海道生まれ。大正五（一九一六）年に國學院大學卒業。卒業後は助手と軍隊生活の後に、大正十三（一九二四）年まで成城学校教員。書簡の内容が示すように、折口信夫と同窓生である。昭和二（一九二七）年に明治書院に入社し、後に編集長となった。『折口信夫全集』には、安藤宛の書簡が収められている。安藤は、折口と親しい間柄にあり、「遼空削りすての歌―その若いころの百二十一首―」（『國學院雑誌』第六十二卷十二号 昭和三十五年十二月）を著し、後に遼空自筆『うみやまのあひだ』（昭和三十九年明治書院）を刊行している。芳賀矢一慶応三（二八六七）年―昭和二（一九二七）年 國學院大學学長。
- ⑭ 埼玉県立川越中学校（現 埼玉県立川越高等学校）は埼玉県入間郡川越町（現 埼玉県川越市）にあり、山形県立米沢中学校（現 山形県立米沢興譲館高等学校）は山形県米沢市にある。（『全国公立私立中学校二関スル調査』（大正十年 文部省普通学務局）などによる。）
- ⑮ 聖岡『日本書紀私鈔』（大正十年 明治聖徳記念学会）。
- ⑯ 林博太郎明治七（一八七四）年―昭和四十三（一九六八）年 教育家・政治家。東京帝国大学教授（文学博士）。伯爵。後に南満州鉄道第十三代総裁となった。（『国史大辞典』に拠る。）
- ⑰ 加藤玄智明治六（一八七三）年―昭和四十（一九六五）年 宗教学者・神道学者。後に國學院大學教授を務めた。（梅田義彦『加藤玄智博士略歴・主要著書論文目録』（加藤玄智『神道信仰要系序論』所収）に拠る。）
- ⑱ 星野日子四郎 明治聖徳記念学会創立からの研究所員。明治三十二（一八九九）年に東京帝国大学を卒業。政法大学では予科教員として漢文を担当。國學院大學では特殊講座を数年受け持った。（『財団法人明治聖徳記念学会紀要』第四十一号（昭和九年九月）、『政法大学百年史』（昭和五十五年十二月）、『中之島村史』下巻（昭和六十二年九月）などに拠る。）
- ⑲ 高瀬承厳 大正大学創立時の大正十五年には教務主任であり、仏教文学を担当している。後に大正大学教授。（『大正大学々報』、『大正大学五十年略史』などに拠る。）
- ⑳ 週刊朝日編『値段史年表明治・大正・昭和』（昭和六十三年 朝日新聞社）に拠る。